

西国三十三カ所を、 三十三回も巡る行者がいた 〜市内に残る満願供養塔〜

橋上猛雄

皆さんは、「三十三度行者」という名を聞いたことがあるでしょうか。「三十三度行者」という名は知らなくても、西国三十三カ所巡礼は知っていると思います。紀伊半島南端に近い熊野の那智山青岸渡寺を第一番とし、概ね近畿地方全体を右回りに回るようにして、最後は美濃の谷汲山華嚴寺で打ち止めとなるよう配置された三十三カ所の観音霊場を巡るもので、数ある日本の巡礼の中でも、四国遍路とともに代表的な存在です。最近では御朱印を求めて、観音霊場をめぐる人も多いようです。

「三十三度行者」というのは、西国三十三カ所の本尊の模刻を収めた「セタ」と呼ばれる笈を背負い、西国三十三カ所巡礼を、な

んと三十三回も巡る人のことを言います。車や電車の無い時代に、歩いて、近畿地方の各地を巡りました。一年に二度ないし三度、西国三十三カ所巡礼を行い、十年から十数年かけて彼らは三十三度巡りました。

この人たちは、特に信仰心の篤い個人的な営みではなく、ある組織に属する専門的・職業的な巡礼行者です。今は「三十三度行者」を見ることはありませんが、彼らの活動は戦後まで続いていた。一方で系譜的には、少なくとも室町時代までさかのぼると考えられています。

三十三の寺は、いずれも奈良時代あるいは平安時代以来の有名な観音寺院で、そのうち槇尾山施福寺(第四番・和泉市)、葛井

寺(第五番・藤井寺市)、総持寺(第二十二番・茨木市)、勝尾寺(第二十三番・箕面市)の四カ寺が、現在の大阪府に属しています。本市は、この巡礼のメインルートにはあたりませんが、市域を通る天野街道と中高野街道が、施福寺から葛井寺に向かう巡礼者の一部に利用されました。

このような「三十三度行者」が、現在の大阪狭山市内を定期的に訪れていました。市内には、彼らの宿となった家もありました。というのは、「三十三度行者」の巡礼は、多くの結縁者のもとに立ち寄りながらの旅だったからです。

彼らが所持していた「宿帳」と呼ばれる帳面は、結縁する家々の名前を旅程にしたがって書き連ねたもので、一つの帳面に数百件の家が記されていました。明治から大正にかけての「宿帳」の記録では、半田、池之原、東野、菜莪木などの地区を中心に延べ百三十一軒もの宿が記載されていました。中でも半田が最も多く四十四軒、次が池之原で三十二軒でした。宿には、行者が立ち寄るだけの家と宿泊する家がありました。宿泊する家では、行者が到着するとその家の仏壇を拝み、セタを

広げ組み立てて観音像を開帳しました。

また、行者が三十三回の巡礼を達成すると満願供養が営まれました。これは行者自らが願主となつて、盛大な供養の法要を営んだもので、現在に残る史料から知れる満願供養の様子は、数年がかりで準備し、供養の場には仮堂を建立して、数日間に数千人の人々を集めるといふ、極めて大掛かりなものであったようです。

この時に三十三度供養塔(満願供養塔)を建立しました。三十三度供養塔は、全体で百五十基ほど確認されていて、市内には三基が存在します。風輪寺(半田)にある天和三年(一六八三)の供養塔、西池尻墓地の享保十五年(一七三〇)の供養塔、西迎寺(東野)にある寛延二年(一七四九)の供養塔です。供養塔の形は、風輪寺

が板碑に近い山型角柱で、あとの二基は宝篋印塔です。この他、菜莪木の正法寺墓地にも、完全な形を保っていませんが満願供養塔が残されています。

本市に隣接する堺市の岩室山観音院にも、二基の三十三度供養塔があり、その建立に本市の多くの人々が関わっています。この供養塔は、天明三年(一七八三)のもので、形は宝篋印塔です。供養塔の基礎や基壇に、岩室村や今熊村、それに池尻村の多くの人々の名が刻まれています。このような人々が資金を出して供養塔が建てられたでしょう。岩室村の庄屋の家に伝わる『岩室村年代記』にも、天明三年三月十六日に始まる三日間の供養のことが記されています。きっと盛大な満願供養の法要が行われ、多くの人が集まったことでしょう。



岩室山観音院の三十三度供養塔